

# 『増鏡』における過去と現在

——「先例」の機能について——

福田 景 道

十二世紀初頭、王朝貴族の没落はすでに疑う余地がなかった。保元の乱を契機に「武者の世」が到来したという見地が表明されたのもこの頃である。さらに、京都の朝廷と並んで東国にも強大な政治権力が成立してからは、前代に比べて公家の活力や威光が著しく減退していったことは否定できない。それに加えて、承久の乱以降は皇位の帰趨や執政者の人選にまで幕府が決定的な影響力をもつ事態が一般化する。このような時代の歴史を衰退する公家の側から叙述する『増鏡』には、武家優勢の現実の中にあつて、あえて公家社会の不滅と繁栄が志向される。時代錯誤、史的洞察力の欠如といつた酷評は甘受しなければならぬ。しかし、絶望的な現実に対して、物語的理想世界の再構築、王朝文化持続の証明をある程度は成し遂げた事実とその文化的生産力の源泉は軽視できないであろう。

悲観的な状況下でなされた『増鏡』の著作には、当然、公家社会の盛時が強く意識され、回顧されたはずである。王朝物語や王朝時代の理想的事跡が頻繁に引用され、規範とされるのは、中世の歴史文学に共通の性格であると同時に、『増鏡』形成の要諦にも深く関与すると思われる。

先例によって理想世界としての王朝時代が希求されるのは『増鏡』の特性の一つと見なせる。したがって、作品内に描かれる諸事象にそれ以前的事实（先例）がどのように機能するのか、というところに問題を設定するのも無意味ではないであろう。

また、一時的にはいえ、幕府の倒壊によって後醍醐帝の統一的政権樹立されたのも現実である。この瞬時の光輝は『増鏡』の中ではどのように捉えられるのであろうか。成功した一時期のみを重視すれば、過去の理想的時代（先例）の回復と見なされるし、結局失敗したことに注目すると、過去を回復できなかったという挫折感や諦念が表出されていることになる。この意味で、先例の問題は作品の本質に関わる。

以上の観点から『増鏡』の「先例」の機能を考察する。

一

『増鏡』にはさまざまな形で前時代の栄光が影を落とす。最も多いのは、『増鏡』の編年体的構成にしがたがって叙述されている事象とそれ以前的事实とが、一致または類似することが明示される場合である。理想

『増鏡』における過去と現在（福田）

的な過去が持続する点に価値が見いだされるとも言える。

かくて、この度撰ばれたるをば、新古今といふなり。元久二年三月

廿六日、竟宴といふ事、春日殿にて行なはせ給。いみじき世のひき  
きなり。かの延喜の昔おぼしよそへられて、院（後鳥羽院）御製、  
いそのかみ古きを今にならべこし昔の跡を又尋ねつ、<sup>(6)</sup>

（第一「おどろのした」二五七頁）

ここでは、後鳥羽院の『新古今集』が、「延喜の昔」すなわち王朝貴族の規範であり理想である醍醐帝の『古今集』に等質化されて、美化されていると考えられる。歴史叙述の対象になっている過去は後鳥羽院時代が、さらに古い別の過去は醍醐朝によって権威付けられ、理想化されるのである。勅撰集親撰は、理想的な治世の証明であった。後鳥羽朝が「昔に恥ぢぬ御世」とされ（第一「おどろのした」二五三頁）、その後鳥羽院の「かの元久のためし」に倣って後嵯峨院が『続古今集』を親撰し（第七「北野の雪」三二五頁）、龜山帝の学才や醍醐帝の治世が「昔に恥ぢず」と賞賛される（第八「あすか川」三三九頁、第十三「秋のみ山」四二二頁）のも同じ発想によるのであろう。これは、さらに次のように二つの方向に向かう。

新旧二つの過去の同一視は、まず理想的過去（醍醐朝）と同等に現実的過去（後鳥羽院時代）を理想化する方向に機能する。それがさらに現実的過去の延長線上にある未来——『増鏡』著作の時点からは過去の場が多い——をも理想化するとも考えられる。<sup>(8)</sup>（この現実的過去は『増鏡』では「今」に定位される）。また、規範を常に過去の盛時に求める限りは、過去を踏襲することはそれ自体価値があるのだが、過去の行為を再現することで、その結果として過去と同一の望ましい現在を未来（行

く末）にまで存続させるといふ効果も期待されている。それは、たとえ  
ば、次の一節に顕著に反映する。

（西園寺実兼女鐙子入内の際の）御衾、二位殿（実兼室頭子）まい  
らせ給ふ。御台まいりて、夜の御殿へ御のぼり。この御衾は、京極  
院（龜山院皇后倭子）のめでたかりし例とかやきこえて、公守（倭  
子兄）の大納言、沙汰し申されけるとかや承りしは、まことにや侍  
けん。（中略）内の上（伏見帝）の、夜の御殿へ召して入らせ給た  
る御草鞋をば、二位殿取りて出で給て、大納言殿（実兼）とふたり  
の御中に抱きて寝給ときこえし。さきくもさる事にてこそは侍け  
めな。  
（第十一「さしぐし」三八二・三八三頁）

これは事実の忠実な記録に基づくのではあるが、そこに当時の公家  
の思想と『増鏡』の志向が顕現するように思われる。西園寺家の期待を  
になう永福門院鐙子の入内に際して後宇多院母后倭子の佳例が踏襲され  
て、倭子に倣って鐙子にも皇位を継承する皇子の誕生が祈念されたので  
ある。実兼夫妻が帝の靴を抱き入れたのも同様の心理によるものである  
う。この実兼の行為に見られるように、過去が理想的であるという前提  
さえあれば、具体的に時点を限定する必要はない。過去の事実または習  
慣を寸分違わず忠実に模倣する点に意味があったと考えられる。このよ  
うな思考がみとめられるなら、過去の同一化は、対象となる事象をその  
行く末も含めて美化し、理想化する営為として理解される。また、規範  
になりさえすれば、「過去」は「事実」であることに制約されない。伝  
承や文芸も理想を具現していれば先例となり得るのである。

以上のように、『増鏡』では、編年体的に叙述される歴史の各時点が  
過去の理想性によって価値を付与されるのである。この事例は多く、全

編を覆い尽し、作品の色調を決定する感すらある。なお、同じ原理で過去の凶例が後代の凶事を強調する場合も散見する。こちらの実例は少ないが、後醍醐帝配流の悲嘆がしばしば後鳥羽院の類似体験の想起を介して描かれるのはその典型である。後鳥羽院や守貞親王の不遇が『源氏物語』に依拠して印象づけられるのもこれに含まれるであろう。そもそも『増鏡』そのものが先行歴史物語という先例に依存して成り立っている。

さて、右の事例はすべて当面の事象と先例とが同一化される場合である。先例の用法のほとんどがこれに属するのは、作品の性格上からも容易に予測できることであろう。ところが、新旧二つの過去の不一致や先例に規制されない現実も『増鏡』中にはたしかに存するのである。ここでも、二つの過去が等質化されるのに二つの機能——その時点を理想化する機能とさらに未来を志向する機能——があったのに対応して、二つの場合が典型的に指摘できる。一つは、先例を現実が上回る場合である。規範となるはずの過去の栄光よりも『増鏡』に対象とされる時代の事象の方がさらに輝かしいと主張されるのである。「武者の世」になつてからすでに久しく、「日本国の衰ふる」こととして公家の衰退を自覚し（第二「新島守」二六八頁）、「昔人」の優雅な後宮に対して「今の世の人」の風流心の欠如を嘆く中で（第七「北野の雪」三二二頁）、過去が超越されていくさまを記し止めるのは、どのような意識の反映なのであろうか。それとは反対に、過去の悲劇よりもさらに悲惨な事態が起こるとするのは不自然ではない。元弘の乱は「ためしもありがたかりし世の騒ぎ」と認識され（「序」二四八頁）、承久の乱の国王敗北は「この国には、いとあまたも」ない「いとあやしかりし」現実であり、仲恭帝の短かすぎる在位が「これや初めなるらん」と惜しまれることなど（第

『増鏡』における過去と現在（福田）

二「新島守」）は『増鏡』とその時代の思潮と矛盾しない。敦明親王の東宮退位よりも東宮邦良親王の急逝の方が悲劇的だとする（第十四「春の別れ」）のも許容できる。しかし、このような記述は多くはないのである。それに比べてみると『増鏡』時代が過去の聖代を凌駕することが頻出する異状がさらに明瞭になるであろう（その実状は後述する）。これが『増鏡』の構造に係わる問題として注目される。<sup>9)</sup>

過去に束縛されない場合の二つめは、先例によって予測される未来がそのとおりに実現しない場合である。作品内に予言されたことが実際と齟齬するということだけでもかなり珍しい。現実にはそういうことは決して珍しくはないであろうが、百五十年に及ぶ歴史的時間がすべて経過し終わった後に、そのすべての概要を知悉した上で著作されたと考えられる『増鏡』の予言が編年体歴史叙述の範囲内で裏切られるとしたら、看過できない。

結局、『増鏡』にある二つの歴史的時間（編年と先例）の関係は以上のように統括できる。ほとんどの先例の用法はこの中に含まれると言つてもよい。理想的な過去に近似し、同化することで「今」が美化される一般的な傾向に対して理想を超越する特殊な場合があり、先例は未来を予測させるといふ一般性に対して先例に反する現実が存在するという特殊性が認められる。このような単純化も可能であろう。こうして『増鏡』の先例は二様に超越される。以下にその特殊な二群を検討する。

## 二

『増鏡』において理想的な先例を超越する最初の事例は早くも首巻に見いだせる。

『増鏡』における過去と現在（福田）

昔の躬恒が、御階のもとに召されて、「弓はりとしもいふ事は」と奏して、御衣給しをこそ、いみじき事にはいひ伝ふめれ。又、貫之が家に、枇杷の大臣、魚袋の歌の返し、とぶらひにおはしたりしをも、道の高名とこそ、日記には書きて侍れ。近ごろは、西行法師ぞ北面の者にて、世いみじき歌の聖なめりしが、いまの代の秀能は、ほと／＼古きにもたまさりてや侍らん。

（第一「おどろのした」二六一頁）

「今」の秀能が過剰と思われるほどに理想化される。偉大な伝説的な歌人である躬恒・貫之や近代を代表する西行よりも、後鳥羽院の寵臣藤原秀能が詠歌で優るといふのであろうか。過去の権威を十分に称揚した直後だけに、幾許かの違和感の生じるのを禁じ得ない。

しかも、これをもって秀能の華やかな時代、つまり後鳥羽院の華やかな時代が全面的に賛美されていると見なすことはできない。なぜなら、肝心の後鳥羽院が過去を超越しないからである。たしかに「おどろのした」の後鳥羽院は前述のように醍醐聖帝の歌道奨励事業を正統に継承し、その治世は「昔に恥ぢぬ」ものであることが強調されていた。「いにしへの事」（古い時代の慣例）に従って競技の賞品を与え、『源氏物語』を踏まえた調理を喜ぶ逸話も紹介されるが（第一「おどろのした」二五九・二六〇頁）、先例よりすぐれるとは決して記されないのである。同時代の將軍源実朝の武士統制力が「代々に越えたり」と絶賛され（第二「新島守」二六九頁）、摂家將軍頼経を擁した北条義時が「世をなびかしした／＼め行なふ事も、ほと／＼古きには越えたり」（同二七一頁）とまで言われるのをも考慮すると、後鳥羽院の賛美は十分とは見なしがたい。

同じく承久の変を対象とする歴史文学『六代勝事記』や『承久記』に比

べると『増鏡』は後鳥羽院にすいぶん好意的ではあるが、『増鏡』の対象年代が類似体験をもつ後醍醐帝までも含む点で『承久記』などとは大差があることを無視するわけにはいかない。『増鏡』の後鳥羽院は後醍醐帝の一時的成功に影響され、承久の乱は元弘の乱に左右される一面が認められるのである。<sup>(11)</sup>やはり後鳥羽院の理想化は不十分と言わざるを得ない。

それに対して、『増鏡』の後嵯峨院は最も過去を超越することの多い帝王である。その高野山御幸は「来しかた行くすゑもためしあらじと見ゆるまで、世のいとなみ、天の下の騒ぎには侍しか。」（第六「おりある雲」三一四頁）と総括され、死去に際しては、

（故後嵯峨院は）卅年が程、世をした／＼めさせ給へるに、少しの誤りなく、思すまゝにて、新院（後深草）・御門（龜山）・春宮（後宇多）、動きなく、又外さまに分かるべき事もなければ、思しをくべき一ふしもなし。なき御跡まで、人のなびき仕うまつれるさま、来しかたもためしなきほどなり。（第八「あすか川」三四〇頁）

と、類例のない幸運が確認される。それに加えて、後深草帝（久仁親王）誕生の際の湯殿の儀式の賞禄を「例の作法にことを添へて、いみじう世の例にもなるばかりとつくし給」（第五「内野の雪」三〇一頁）ように後嵯峨院は新しい先例を作ろうとさえするのである。宗尊皇子將軍宣下を「かゝる例はいまだ侍らぬにや」（第五「内野の雪」三〇七頁）というのも、後嵯峨院の事跡として評価されるのかもしれない。<sup>(12)</sup>

西園寺家の栄華も『増鏡』では極度に賛仰される。後嵯峨院時代のこの一門の形容にも過去の理想を超越する言辞が用いられる。

かの法成寺をのみこそ、いみじきためしに世継もいひためれど、こ

れ（西園寺）はなを山の気色さへおもしろく、都はなれて眺望そひたれば、いはんかたなくめでたし。（第五「内野の雪」二九九頁）

西園寺公経が夢告に従って建立し実氏が受け継ぐ「世に知らずゆゑき御堂」は、あの大宅世継が絶賛した道長の法成寺をさらに上回ると断言するのである。『栄花物語』や『大鏡』で王朝文化隆盛の象徴として仰視された法成寺を凌ぐ現実が『増鏡』時代に存在するというのである。後深草帝の後嵯峨院への朝覲行幸を自家のこの上ない栄誉と感じた実氏の「ためしなき我身」に始まる寿祝歌とその日に見られた装束の「こしかたも例なきまで」の豪華さが紹介されるが（第五「内野の雪」三〇九頁）、これも『増鏡』では異例の飾辞である。また、「たゞ人」実氏の二女（大宮院姞子と東二条院公子）が后・国母に並び、大臣の二子（右大臣公相と内大臣公基）が左右の近衛大将を独占した壮観は「ためし稀にやあらん」「ためしいとあまたはきこえぬ事なるべし」と賛嘆される（第六「おりるる雲」三一三頁）。『大鏡』には道長の三女が后・国母に並んだことが特記されているのにそれにはあえて触れず、過去の大将独占の実例も看過して、西園寺家の比類ない「御さかへ」を印象付けようとしているようにも思われる。

先例超越が顕著な箇所は、このほかに、九条道家の三子の家系が末代まで撰関家として存続すること、大宮院（後嵯峨帝中宮、実氏女）の皇子・孫三人が帝位につきしかも女院を含めて全員が健在なこと、北山准后（実氏室）九十賀の際の連歌にみえる西園寺実兼の「むかしにも猶たち越ゆる」という歌句、永福門院鐙子（実兼女）入内の供奉の衣装の華美なこと、伏見院の「昔の行成」にも優る能書のことなどが確認できるが、それほど多くはない。このうち、伏見院の書の賛辞は秀能の歌と同

『増鏡』における過去と現在（福田）

趣で、治世の評価とは少し異質なように思われる。残る四例のうち道家流の永続を除く三例は西園寺家の栄華を称えるものと判断できる。また、道家の栄華は本来西園寺家との姻戚関係に依存していたことが、「（道家の）北の方は公経の大臣の御女なれば、まして世の重くなびき奉るさま、やんごとなし」（第三「藤衣」二八五頁）、「北政所の御父は、公経の大臣なれば、かの殿とひとつにて、世は弥御心のまゝなるべし」（同二八九頁）と繰り返されており、これも西園寺家の栄華の一環と考えて支障はない。

『増鏡』で先例が克服される箇所は、巻五「内野の雪」から巻十一「さしぐし」巻頭までに集中し、西園寺の偉観に始まって西園寺鐙子入内に終わるとも言える。こうして後嵯峨院の盛栄と実氏・実兼を中心とする西園寺家が院と一体化して栄華を極めたさまが先例を超える形で強調される実態が明らかになる。

なお、この時代の皇統分裂の実状に留意すれば、大覚寺統に比べて持明院統に先例を超越する場合が多出する偏向が指摘できる。鐙子が入内したのは後深草院政下の伏見帝の後宮であった。後深草院の湯殿の儀については既述した。能書の伏見院もこの一統に属する。また、龜山院政期でありながら後深草院のもとに関白・大臣以下散位・入道の者に至るまで「数知らず」「花やかに」参集するのを、

昔の後二条関白師通ときこえしは、「おりるの御門の門に、車の立つべき事かな」と、そしり給けるに、今の世を見給はばと思出でらる。

（第十「老のなみ」三六三頁）

と、『今鏡』で師通が院政を攻撃した逸話を引き合いに印象付けられている。過去を知る者には後深草院の権勢は驚くべきものに映るであろう。

## 『増鏡』における過去と現在（福田）

一方、大覚寺統にはこのような美飾はなされていない。それどころか、龜山帝の居所の火災をさらに悲惨な三条朝の内裏焼亡に例えて龜山帝の退位の予兆として扱うような例さえ見いだせるのである（第八「あすか川」三四五頁）。龜山院に皇子女が多いことについて「昔の嵯峨天皇こそ、八十余人まで御子もたまへりけると、うけたまはり伝へたるにも、ほと／＼劣り給まじかめり。」（第十「老のなみ」三六〇頁）と述べられるのには、嵯峨帝をも上回るという含意があるのかもしれないが、それで龜山院が賛美されているとは言い切れない。後深草院と対照的である。これは西園寺家、特に実兼の動向に一致するのではあるが、持明院統の隆盛を強調する一面が確認できる。<sup>(13)</sup>『増鏡』の後嵯峨院時代が注目されることが多いが、後嵯峨院の後継者としての持明院統も脚光を浴びると考えられるのである。

## 三

『増鏡』には歴史の変動があらかじめ予告されることが多い。前述の、凶例によって予告された龜山帝退位はその直後に現実になる。後鳥羽院の承久の敗戦は日吉社の神託によって当初から予知されていた。後高倉院・後嵯峨帝の予想外の政権獲得や後醍醐帝の京都帰還は前もって夢告されていた。これらは物語文学などにも頻出する話型で、巷間にも流布していたに違いない話題なので、『増鏡』の性格や想定される典拠採択方法に照らすと、原資料がそのまま取り入れられたのかもしれない。<sup>(15)</sup>しかしながら、とにかく『増鏡』には作品中に予言された事柄がそのとおりに実現しない場合が、かなり重要な事件に関して確認できるのである。しかも、そのほとんどが先例による予言なのである。ただし、他の歴史

物語に対する『増鏡』の特異性を考えると、予言を予言たらしめないことが構想上の効果をもたらす一点は無視できない。「今」に関することである。

『増鏡』作品の「今」は、ある年の二月十五日、嵯峨の清涼寺で老尼から筆者が「昔物語」を聞いた時であろう。ところが、作品内に実際に見いだせる「今」はそれぞれの事件が起こった時点のことなのである。<sup>(16)</sup>昔の師通の一言に対して「今の世を見給はば……」と言ったときの「今」とは老尼が史談を展開しているときではなくて、後深草院のもとに公卿以下が絶えず参集していた時点を意味するとしか考えられない。つまり『増鏡』には少なくとも二つの「今」が存在することになる。これが『増鏡』が『大鏡』や『今鏡』とは明らかに異なる点である。この特質に関しては多方面から追及できるが、ここでは構想上の効果の一つを指摘しておく。その効果とは、運命の急転を克明に印象付けられることである。<sup>(17)</sup>

かつて、『増鏡』には顕栄の世界（明）だけでなく同時にその背後にある不遇の人々の境遇（暗）も描かれ、しかも明と暗とは原則として逆転するという基調があることを指摘したことがある。<sup>(18)</sup>この基調には「今」の移動が有効に機能する。将来の顕栄を知らないからこそ「今」の失意は失意たり得るし、大きな絶望があつて初めて未来の喜びは絶大なものになる。持明院統の空前絶後の繁栄が「今」のこととして縷述される段階に、元弘の動乱で敗走する六波羅探題に同行して山中を彷徨する運命が二上皇と帝に待ち受けていることを想像できたろうか。将来の暗雲を知らないからこそ、その時の顕栄は完全なものになり、過去の栄耀栄華が華々しいからこそ、それに続く惨状がより悲惨に映る。もしも、すべての出来事が経過した後の最終的な時点が「今」であったなら、これ

ほどまでの落差は生じ難いのではないだろうか。また、もしも読者が作品内の「今」の進行に同行する形でしか『増鏡』の歴史的世界を知得できないと仮定すると、移動する「今」は決定的に効力を発揮する。

これに先例に導かれる予言が加わると明暗の落差はさらに大きくなる。予定された栄華や破滅がそのとおりに訪れず、まったく反対の境遇に至り着いたとき、その歓喜や落胆は倍加する。この意味でも『増鏡』の先例の機能は無視できない。こうして先例によって強調された歴史事象が『増鏡』構想の根幹を左右することが予想され、『増鏡』作者の関心の所在を暗示することにもなる。

#### 四

『増鏡』に見いだせる先例による予言には吉兆も凶兆もある。まずそれらが予言として明確に機能する場合の典型を例示しておく。

内侍所・神璽・宝剣は、讓位の時かならず渡さる事なれど、先帝(安德)筑紫へ率ておはしければ、こたみ初て三の神宝なくて、めづらしき例に成ぬべし。後にぞ内侍所・しるしの御箱ばかり帰のぼりけれど、宝剣はつるに、先帝の海に入給ふとき、御身にそへて沈みけるこそ、いとくちをしけれ。(第一「おどろのした」二五二頁)

今上(四条帝)は二歳にぞならせ給。あさましき程の御いはけなきにて、いつくしき十善のあるじに定まり給事、いとゆゝしきまで、前の世ゆかしき御ありさまなり。むかし、近衛院三、六条院二にて位につき給へりし、いづれもいと心ゆかぬためしなり。

(第三「藤衣」二八七頁)

初めの一節は後鳥羽帝即位の記録とその際の批評である。先例を破っ

『増鏡』における過去と現在(福田)

て三神器を携えなかった凶例に加えて、宝剣が永久に失われたことが惜しまれているが、承久の変による悲劇的末路の予兆と見なしても大過ないであろう。ここは承久の変の顛末を踏まえた上で書かれたように思われる。神聖な先例に従えなかったために前例のない悲運に見舞われたということになる。『増鏡』においては、この種の因果関係は随所に指摘できる。

後の引用は、四条帝践祚に対する老尼の評言であるが、前掲の例と反対に過去の凶例を踏襲したために、帝に不幸がもたらされることが暗示される。この少し前には「さきの承久の廢帝の、生させ給とひとしく坊に給へりしは、いと不用なりしを」という四条帝の生後まもなくの立場に対する世評が伝えられていた(二八六頁)。「さきの承久の廢帝」とは後に仲恭と呼ばれる、幕府に廢された幼帝である。後年の四条帝夭折の事実が明確に意識されているの記述に違いない。先例はこうして『増鏡』の各記事を関係づけるのである。一貫した構想をもつ歴史物語と単なる記録との差異はここにもある。しかし、この因果関係が常に適用できるわけではない点に問題がある。次に予言がみごとに裏切られる場合を、仲恭帝践祚によって検証する。

四月廿日、御門(順徳)降りさせ給。春宮(仲恭)四にならせ給に讓り申させ給。近頃、みなこの御齡にて受禪ありつれば、これもめでたき御行末ならんかし。(第二「新鳥守」二七一頁)

「近頃」の先例は後鳥羽院と土御門院の四歳践祚を示すが、わずか七十余日後に「めでたき行末」ではなかったことが明らかになる。前途洋洋としていたはずの仲恭帝の悲運は鮮烈になる。後鳥羽院らの先例も実は不吉だったのである。四条帝の場合に比べて明暗の落差を際立たせよ

『増鏡』における過去と現在（福田）

うという意図がより強く投影しているのかもしれない。「明」はその立場の際に「いま一しほ、世の中めでたく、定まりはてぬるさまなめり」（第一「おどろのした」二五九頁）と将来が約束されたかのような印象が与えられることでも強調されているが、この予測も完全に裏切られる。『増鏡』における承久の変の重要性が看取できるとともに、四歳踐祚がここに凶例に転じたことも確認できる。

ところが、これほど明確な前例がありながら、二十五年後には、後深草帝（久仁親王）の四歳踐祚が祝福される。

正月廿八日、（後嵯峨帝は）春宮（後深草）に御位譲り申させ給。

この御門も又四にぞならせ給。めでたき御例なほどもなれば、行末をしはかられ給。（第五「内野の雪」三〇二頁）

四歳の踐祚は明らかに吉例と見なされている。この「めでたき御例ども」は後鳥羽・土御門・四条の三帝の踐祚の事実以外ではありえない。

本来なら不吉なはずの先例が将来の「めでたさ」を予測させる方向に機能するのである。「新島守」の四条帝受禪の記述がそのまま転用された結果かもしれないが、そうであれば三帝の末路が詳述された後の記事としては不注意の誘りは免れまい。前後をそれほど勘案しないで、まとまった原資料を忠実に転載した結果だとしたら、編作の杜撰さを露呈してしまっただことになる。あるいは、意図的な作為ということも考えられる。すべてを熟知していながら、凶例を吉例に擬装した可能性もないわけではない。そうすると前述の持明院統美化の基調に合致する。偶発的に生じた破綻としても、その根底に持明院統を支持する精神があつたことかもしれない。

このように予測するのは、実は『増鏡』の作為的な先例克服には同様

の傾向が抽出できるからでもある。次に伏見院（熙仁親王）立坊の記事を引いて、それを例証する。

（熙仁親王は）御門（後宇多）よりは、いま二ばかりの御兄なり。

まうけの君、御年まされるためし、遠き昔はさてをきぬ、近比は三条院・小一条院・高倉院などやおはしましけん。高倉の御末こそ、今もかく栄へさせをはしませば、かしこきためしなめり。いにしへの天智天皇と天武天皇とは、おなじ御腹の御はらからなり。その御

末、しばしは、うちかはりく世をしるしめしためしなむを、思ひや出けむ。御二流れにて、位にもおはしまさなむと思ひ申けり。

（第九「草枕」三四九・三五〇頁）

東宮が帝より年長である先例と、帝と東宮が二系統から出た史実によつて、持明院統と伏見帝の皇位継承を正当視し、予祝する意図が察知できる。この直前には、この立坊を決めた執権北条時宗の賛美と「これぞあるべきことと、あいなう世人も思ひいふべし」という、立坊を支持する世評も添えられている。しかし、ここに引用した箇所から与えられる印象と歴史事実とは必ずしも一致しない。まず、六条帝の三歳年長の東宮だった高倉院の末流はたしかに以後の皇位を独占して栄えているが、三条院と小一条院の場合はむしろ不吉な前例となる。皇位を追われそうになった三条院は讓位と引き替えに第一皇子の立坊に成功したが、院の没後、今度は東宮がその地位の放棄に追い込まれてしまう。これ以上の凶例はない。その退位した悲運の東宮が、教明親王すなわち小一条院なのである。この『栄花物語』や『大鏡』にも載る著名な史実をあえて無視して熙仁立坊を賛美するところには、持明院統を支援する姿勢が顕著に窺えるであろう。また、天智・天武両帝の子孫が交代で皇位に就いた

というのも正確ではない。むしろ光仁天皇の即位によって天武系から天智系に皇位継承権が大移動した事実が注目されるべきかもしれない。ここにも忠実の操作が想定できる。

『増鏡』の先例はそれぞれの意図に応じて自在に解釈され、潤色され、また、取捨選択が行われているのである。本来は未来を規定できないはずの先例を、その後の事実符合するように改変しているとも言える。ここに『増鏡』構想の基調、歴史叙述の基本姿勢が露呈してくる。

ただし、その基調は、持明院統の理想化に尽きるのではない。天智系と天武系の交立を強調して、天智系の終局的勝利を隠蔽した点にそれは具現する。持明院統の正統性を主張するには、当然、兄の天智帝の末流を正統と認知すべきであろう。したがって、この一節からは持明院統は支持されるが、同時に両統並存の現実も肯定されることが窺知される。

同様の例は他にもある。たとえば、伏見帝踐祚によって、後深草・龜山両院に後宇多院が上皇に加わったことについて「太上天皇三人世におはします比なり。めづらしく侍るにや。」(第十一「さしぐし」三八〇頁)と淡々と記されるが、三上皇鼎立の前例は次のようにすでに注目されていた。

かゝれば、ふりにし事を思ふにも、猶さりともし、いかでか三皇今上あまたおはします宮この、いたづらに亡ぶるやうはあらんと、頼もしくこそ覚えしに、かくいとあやなきわざの出で来ぬるは、この世ひとつの事にもあらざめども、迷ひのおろかなる前には、なをいとあやしかりし。

(第二「新島守」二七七・二七八頁)

承久の変の総括の中の一文である。この凶例を知っていたとすれば、元弘の動乱の予兆にもなり得た三院鼎立を「めづらしく侍るにや」とい

うのは簡潔すぎる。先例を臚化して両統からの上皇の共存、両統迭立の現状を容認する言質とも理解できるのではないだろうか。『増鏡』には二者の対等対立を肯定する思想がある。<sup>(20)</sup>

ところで、この先例操作の二例は、ここまで頻りに取り上げた巻五から巻十一冒頭の先例超越の多出する箇所、後嵯峨院・西園寺実氏・同実兼を中心とする時代に含まれる。それ以外の部分にも目を向けなければならぬ。

後鳥羽院が先例超越の形では賛美されず、承久の政変で失墜することは先例によって予知できていたことはすでに述べた。それでは、『増鏡』終盤の中心人物後醍醐帝の場合はどうであろうか。この帝は第十一「さしぐし」の鐙子入内後に登場する。

## 五

後醍醐帝の境遇が後鳥羽院に酷似し、承久と元弘の政変の状況の照応が『増鏡』著作の契機であったとすれば、<sup>(21)</sup>後鳥羽院と後醍醐帝の差異が究明されなければならない。後醍醐帝が後鳥羽院にできなかった隠岐脱出や北条氏倒滅に成功した事実があるかぎり、両者を同一に造型するわけにはいかないであろう。この相違を、後醍醐帝が後鳥羽院の先例を超越した結果と捉えるのが『増鏡』の立場ではないかと思われる。後嵯峨院に特徴的な先例を超える極端な賛辞は後醍醐帝には与えられていない。この点では後鳥羽院と異ならないが、後醍醐には、過去の凶例を克服して吉例に転ずるような特殊性が見いだせる。

隠岐への道中、後醍醐帝は各所で後鳥羽院の先例を踏襲せざるを得なかった。帰京の叶わなかった後鳥羽院の運命を追体験するかのよう

『増鏡』における過去と現在（福田）

ある。

ふりにし事を思し出づるにも、たち返また世をやすく思さん事のと  
かたければ、よろづ今をとちめにこそと、思しめぐらすに、人  
りならず、口惜しき契り加はりける前の世のみぞ、つきせすうら  
しき。  
（第十六「久米のさら山」四五八頁）

三日月の中山にて、むかし後鳥羽院の仰られけん事思し出づるさ  
へ、げに憂かりけるためしなり。

伝へ聞く昔がたりぞうかりけるその名ふりぬる三日月の松

（同四六四頁）

このように、後鳥羽院配流の「ふりにし事」を想起し、同じ行路を辿  
った院の故事を反芻して、先帝後醍醐は自己の運命を承久の昔に重ね合  
わせずにはいられないのである。また、隠岐に着いてからも、

御身の上はさしをかれて、まづかのいにしへの事思し出づ。かゝる  
所に世をつくし給けん御心のうち、いかばかりなりけん、あはれ  
にかたじけなく思さるゝにも、今はた、さらにかくさすらへぬるも、  
何により思ひ立ちし事ぞ、かの御心の末や果たし遂ぐると思ひしゆ  
へ也。昔の下にもあはれと思さるらんかしと、かき集めつきせすな  
ん。  
（第十六「久米のさら山」四六五頁）

と後鳥羽院の無念に思いをはせ、自身の倒幕計画は院の遺志を受け継ぐ  
ものであったことを告白する。元弘の政権奪還も後鳥羽院の宿願が果た  
されたものと見なされる（第十七「月草の花」四八六頁）。後鳥羽院に  
類似させるために後醍醐帝関係の勅撰集記事が操作されていると言われ  
る。<sup>22</sup>『増鏡』構想の要諦はここにある。

ここまで徹底的に後鳥羽院に同一化された後醍醐帝を再起させるため

には、両者の類似した体験の中に、後々の運命を左右するに値する明確  
な相違点が用意されているのではないかと思われる。両者の差異は様々  
な観点から数多く指摘できるであろうが、先例としての後鳥羽院を克服  
して、後醍醐帝の将来を切り開くような相違点にも触れておきたい。

その相違点として、『増鏡』の構想に関連してさしあたって次の三点  
が想定できる。まず第一に、後鳥羽院の場合はその境遇の禍福が院個人  
の責任に帰せられる傾向が強いのに対して、後醍醐帝は近臣を初めとす  
る他人の活動に運命を左右される場合が目立つという対照が注目され  
る。後鳥羽院の承久の敗因に日吉社の神輿の侵入を阻止したことが挙げ  
られるところで、阻止は院の命じたことではないにもかかわらず『責  
め一人に』といふらん事にや」と嘆息される（第二「新島守」二七四頁）。  
全責任が天子個人に帰着するという口吻である。一方、「なま腹ぎたな  
き」近臣が後醍醐帝とは無関係に帝の親政開始を祈ったことが見え、帝  
とは別の道理で政治に関わろうとする臣下の存在が知られる（第十三「秋  
のみ山」四二〇頁）。これは後嵯峨院などにもある程度共通するが、後  
鳥羽院とは隔絶する特性である。また、配流の途次の国々で帝に心を寄  
せる人々が絶えないのを「いにしへの御幸どもには、かうはあらざりけ  
り」（第十六「久米のさら山」四六四頁）と、「いにしへの」後鳥羽院と  
の違いを強調している。他人が帝の再起を助けるのである。その上、絶  
望の淵にあるときに敵將佐々木道誉の帝への敬心までが記され、後の再  
起の伏線になる場合さえある。<sup>23</sup>

第二に、後鳥羽院と後醍醐帝の目的達成への意欲の差が指摘できる。

後鳥羽院が配流後ひたすら失意の日々を送ったのに比べて、後醍醐帝は  
倒幕の意欲を失わないという点がある。隠岐への道中に「たいらかにだ

にあらば、をのづから御本意とぐるやうもありなん」(第十六「久米のさら山」四六四頁)と目的達成を夢見るのである。さらに、寵臣具行の辞世の歌「消えかゝる露の命のはては見つさてもあづまの末ぞゆかしき」にまで倒幕を「思ふ心」が表明されている(同四七二頁)。ここに後醍醐帝固有の近臣の助力と目的遂行の意志の力が端的に現れると思われる。しかし、この二点はここで追及する対象としては過大な面があるので、別稿に改めて論じることにする。

さて、残る第三の特殊性は、少なくとも現存の『増鏡』最末部までは後醍醐帝の皇統が存続することである。ただし、これは大覚寺統派の立場で『増鏡』が著作されたという旧来の見方<sup>(24)</sup>とは観点が異なる。持明院統や幕府を否定することを意味しない。また、帝も後鳥羽院の末流であって院の皇統も同時に持続しているというのとも趣を異にする。なぜなら、前述の両統並立構想に従って後醍醐系は肯定されるからである。こうして、二種の先例克服が結び付く。これを本稿で論及してきた先例超越に関連させて、次のようにまとめられることできる。

一、『増鏡』では先例を適度に操作しながら、両統の並存をあるべき状態として承認している。

二、持明院統は理想的先例を超越することで、後醍醐帝は後鳥羽院の先例を克服することで『増鏡』世界の正統になり得る。

三、持明院統を支える先例が主に作品の対象期間の前のものであるのに対して、後醍醐帝が克服すべき先例は作品の中にある。

『増鏡』に見られる先例は極めて多数かつ多様であるが、先例が規制する枠の外に出る事態は少ない。しかし、過去がひたすら憧憬される傾

『増鏡』における過去と現在(福田)

向の作品にあって過去を超える現実が少しでもあることの意義は軽視できないはずである。これを検証すると、先例の取り上げ方にかなり作為的な面が見いだせる。その作為の目的のひとつに両統並存を容認するところがあるというのが、本稿の到達したところである。その過程において、『増鏡』が後鳥羽・後醍醐をそれぞれ中心にする三部から成るとする、いわゆる三部構成説を支持する方向の徴証も散見したように思われる<sup>(25)</sup>。また、西園寺家を別にすれば、先例を超える事柄のほとんどが皇位に関わり、『増鏡』の機軸に皇位継承史的構想が存在することも裏付ける。

なお、従来増補本と見なされてほとんど顧みられなかった流布本(二十巻本・十九巻本)系の本文が、実は『増鏡』<sup>(27)</sup>の原態に近いという見解がある。それに対する疑問も提示されていて、その是非は決し難い現状にあるが、この本文も古本(十七巻本)系とともに検証の対象に含まれるべきであろう。しかし、流布本が混態本でしか残っていないと言われ<sup>(28)</sup>ることもあって、『増鏡』全編の脈絡を重視した本稿ではあえてその本文には触れなかった。十九巻本については別の機会に検討を加えたい。

#### 註

- (1) 保元元年七月二日、鳥羽院ウセサセ給テ後、日本国ノ乱逆ト云コトハヲコリテノチムサ(武者)ノ世ニナリニケルナリ。(『愚管抄』巻第四。岡見正雄・赤松俊秀校注『愚管抄』日本古典文学大系86、昭和四十二年、岩波書店刊、二〇六頁)

- (2) 岡一男「増鏡についての私説」『月刊日本文学』昭和六年九月。同著『古

『増鏡』における過去と現在 (福田)

- 典の再評価——文芸科学の樹立——(昭和四十三年、有精堂刊)に再録)、同「解説」(同著『増鏡』日本古典全書、昭和二十三年、朝日新聞社刊)、山岸徳平・鈴木一雄「総説」(同編『大鏡・増鏡』鑑賞日本古典文学第十四巻、昭和五十一年、角川書店刊)など。
- (3) 山下宏明「増鏡」の世界」(『名古屋大学文学部論集(文学)』第二十三号、昭和五十一年三月)、西沢正二著「増鏡」研究序説」(昭和五十七年、桜楓社刊)など参照。
- (4) 小峯和明「増鏡」(大曾根章介他編『歴史・歴史物語・軍記』研究資料日本古典文学第二巻、昭和五十八年、明治書院刊)参照。
- (5) 和田英松「増鏡の研究」(『日本文学講座 第三巻』昭和九年二月、改造社刊。同著『重修増鏡詳解附録』昭和十年、明治書院刊)・同著『国史説苑』(昭和十四年、明治書院刊)に再録)、金子大麓「増鏡における王朝的なるもの——その昂揚と頽廃——」(『岡一男博士頌寿記念論集 平安朝文学研究—作家と作品—』昭和四十六年、有精堂刊)など参照。
- (6) 『増鏡』本文の引用は、時枝誠記・木藤才蔵校注「増鏡」(『神皇正統記』日本古典文学大系87、昭和四十年、岩波書店刊)により、( )内に補足説明を適宜補った(以下同じ)。
- (7) 井上宗雄「『増鏡』と和歌」(山岸徳平他編前掲書(2))参照。
- (8) 石田吉貞「増鏡作者論」(『国語と国文学』第三十巻第九号、昭和二十八年九月)、宮内三二郎「『増鏡』の成立年代」(『鹿児島大学教育学部研究紀要』第二十五巻、昭和四十九年三月。宮内氏の論文はすべて同著『とはずがたり・徒然草・増鏡新見』(昭和五十二年、明治書院刊)に再録されている。)、同「増鏡の成立」(『国語と国文学』第五十一巻第九号、昭和四十九年九月)、西沢正二前掲書(3)三五〜四一頁など参照。
- (9) 木藤才蔵氏「史論と歴史物語」(『講座日本文学 6 中世篇II』昭和四十四年、三省堂刊。同著『中世文学試論』(昭和五十九年、明治書院刊)に再録)には、『増鏡』作者が「この縮小された宮廷生活を、平安朝盛時のそれよりも花やかに描いた」理由として、古代が終焉を告げる時期(『増鏡』成立時期)に「古代的なもの」が最も顕著に現れるという一般性をあげられる。しかし、本稿ではこれとは違った観点から考究する。
- (10) 木藤才蔵「増鏡における後鳥羽院」(『和歌文学の世界 第三集』昭和五十年、笠間書院刊。同著前掲書(9)に再録)参照。
- (11) 西沢正二「『増鏡』に関する一試論——後醍醐帝の物語をめぐって——」(『日本文芸論稿』第三号、昭和四十五年六月)、同著前掲書(3)三四三頁、山下宏明前掲論文など参照。
- (12) 宮内三二郎「兼好法師と増鏡——増鏡の作者は兼好ではあるまいか——」(私家版、昭和四十六年九月)、同「増鏡と西園寺家——増鏡は西園寺家々門史でもある——」(『国語国文薩摩路』第十六号、昭和四十七年一月)、加納重文「増鏡」の思想」(『古代文化』第二十八巻第六・七号、昭和五十一年六月・七月)など参照。
- (13) 伊藤敬「増鏡の思想(完)」(『藤女子大学国文学雑誌』第三十四号、昭和五十九年十二月)参照。
- (14) 加納重文前掲論文(12)、深津陸夫「増鏡」の勅撰和歌集記事をめぐって」(『皇学館論叢』第十五巻第四号、昭和五十七年八月)など。
- (15) 木藤才蔵「増鏡の編集資料」(同著前掲書(9))参照。
- (16) (8)に同じ。
- (17) 伊藤敬氏「増鏡——仮名物語の伝統」(『国文学解釈と鑑賞』第五十四巻第三号、平成元年三月)に、『増鏡』が現在時制をとる点について「不

滅に対する時時刻刻の生滅流転の相は、編年・日記的実録の体裁が効果的なのであった。年年ごとに叙し去って昨日今日に至る、そのため一貫性や主題が見えにくくなったが、生滅の理はかえって確かとなった。」と述べられている。以下は、その繰り返しになるかもしれない。

- (18) 拙稿『増鏡』の世界——「皇位継承」の意義をめぐって——『日本文芸論叢』第二号、昭和五十八年三月)。この中で次のように述べた。

『増鏡』も、主として、時を得た顕栄の世界を対象とするが、常にその裏に失意に沈む人々の悲嘆があることを想起させずにはおかないのである。(中略)

これは『栄花物語』以来の明暗対比の方法を受け継ぐものであろうが、『増鏡』の場合は、単なる対比に終わっていないように思われる。すなわち、失意に沈む人々が必ずと言っていいほど顕栄の世界に浮上もしくは再浮上するのである。そして栄光を掌中にしていた皇統にやがて失意の日々が訪れる場合が多い。明と暗とは反転を繰り返す。一時の失意が、将来の繁栄を約束するかのようである。

- (19) まことや七月九日、御門(仲恭)をもおろしたてまつりき。この卯月かよ、御讓位とてめでたかりしに、夢のやうなり。七十余日にて降り給へるためしも、これや初めなるらん。もろこしにぞ、四十九日とかや位におはする例ありけると、唐の書読みし人のいひし心ちする。それもかやうの乱れやありけん。(第二「新島守」二七六頁)

- (20) 中村直勝「鎌倉時代の公武の関係について——増鏡研究の方法と其実例——」(『歴史公論』第七卷第十一号、昭和十三年十月)参照。

- (21) 『増鏡』の歴史叙述が後鳥羽院に始まるのを、「序」に言われるとおりに、『弥世継』の後を受けて歴史物語の系譜を持続させるためとみることは

『増鏡』における過去と現在(福田)

きない。作品の統一性のための必然であったと思われる。南波敦子「増鏡の史観について——とくに鎌倉の武家に対する記述から——」(『史海』第十三号、昭和四十一年三月)、拙稿『今鏡』に描かれる藤原道長の栄華——残映としての『大鏡』——(『島大国文』第十八号、平成元年十一月)参照。

- (22) 深津睦夫前掲論文(14)。

- (23) 山岸徳平・鈴木一雄編前掲書(2)二八八頁参照。

- (24) 尾上八郎「解題」(『校註日本文学大系』第十二卷、大正十五年五月、国民図書刊)、中村直勝「増鏡」(『岩波講座日本文学』第十三回配本、昭和七年六月)、和田英松前掲論文(5)など。

- (25) 木藤才蔵「解説」(前掲書(6))、田尻幹子「典拠から見た増鏡の性格」(『名古屋大学国語国文学』第二十号、昭和四十二年六月)、宮内三三郎「兼好法師と増鏡——増鏡の作者は兼好ではあるまいか——」(前掲(12))、金子大麓前掲論文(5)、加納重文前掲論文(12)、西沢正二前掲書(3)一〇五〜一〇頁などに三部構成説が展開されている。

- (26) 前掲拙稿(18)参照。

- (27) 宮内三三郎「増鏡の原形態——二十巻本が原形に近い——」(私家版、昭和四十六年十月)、高橋宏幸「増鏡論」(『史料と研究』第四号、昭和五十年六月)、伊藤敬「増鏡」流布本考」(『藤女子大学・藤女子短期大学紀要』第二十号、昭和五十八年一月)、同「統」増鏡」流布本考」(『藤女子大学国文学雑誌』第三十一号、昭和五十八年六月)など。

- (28) 吉岡幹子「一条冬良と『増鏡』」(『後藤重郎教授停年退官記念国語国文学論集』昭和五十九年、名古屋大学出版会刊)。

- (29) 鈴木登美恵「『増鏡』の本文異同をめぐって——後崇光院本の検討から

『増鏡』における過去と現在（福田）

——『中世文学』第三十号、昭和六十年五月）参照。

（30）伊藤敬前掲二論文（27）。